

春蘭の里実行委員会（石川県能登町）

高齢者は地域の宝!!

あるものを活かして地域づくり

春蘭の里実行委員会
事務局長

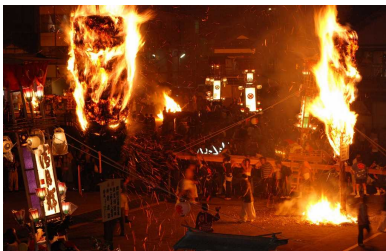
ただ きいちろう
多田 喜一郎



1. 能登町の概要

春蘭の里実行委員会が活動している能登町は日本海に突き出た石川県能登半島の先端にあり平成 17 年に海に面した旧能都町・旧内浦町と内陸部の旧柳田村の3 町村が合併してできた新しい町です。東と南は海岸線が続き、海岸線の大半が能登半島国定公園となっています。その反面、北西端にはブナ林で知られる鉢伏山があり、町域の約 8 割が丘陵地という、海と山に囲まれた風光明媚な土地です。

また、この地域は自然の恵みへの感謝や神への信仰が厚く各地でキリコ祭りやアマメハギ、ユネスコ無形文化遺産に登録された「あえのこと」などの民俗風習や文化が今も多く受け継がれています。



キリコ祭り「あはれ祭」

しかし、能登半島全体がそうであるように、能登町も過疎・高齢化が進み、文化の継承や集落の維持が難しくなっています。

2. 活動開始の背景・経緯

■集落が無くなる!!

春蘭の里実行委員会の原点は、内陸部に位置する宮地・鮭尾地区です。丘陵地を流れる山田川の上流域沿いに農地が広がり、里山と黒い瓦と白い壁の古民家が残る美しい景観を残している地域です。

後に実行委員会となるメンバーが話し合いを始めたのは平成 3 年の頃です。私たちの集落にも過疎・高齢化の波が襲っていました。昭和 35 年に 502 人いた人口が半分になり、更に「10 年経てば農家が半分になる、

集落が無くなってしまおう」という危機感から平成 8 年に春蘭の里実行委員会を立ち上げました。この問題に真っ向から立ち向かい、地域活性化に向けた活動を開始しました。

■最初は 7 人で

メンバーは宮地と鮭尾の 2 地区 7 人から出発しました。設立に当たっては集落全体で盛り上げるか、話し合いを重ねてきた 7 人でやるかという議論をしましたが、集落全体の合意には時間もエネルギーも必要です。まず活動できる 7 人でやってみせて引っ張って行くことで、賛同者も増えるだろうと言う結論になりました。実際に事業の発展に伴って徐々に参加者・協力者が増えています。また、最初から行政の援助を頼ると活動は伸びないし続かない、本気で良い活動をしていけば行政も賛同してくれる、と考えて行政を頼らないところから始めました。後の話ですが、地域の廃校をグリーンツーリズムの拠点とするため、交流宿泊所「こぶし」として改修した時に町が援助してくれたのは、私たちの本気を行政が認めてくれたからだと思います。

その一方で国道や県道が地区内に通っている交通の便が良い地域でもあり、特に平成 15 年に開港した能登空港から車で 15 分の距離にあり、首都圏からの来訪者を多く期待できる場所となっています。

■地域の魅力

活動に当たっては山菜やキノコ採りが楽しめる山々、集落を流れる美しい川、雄大な自然の恵みがあふれているこの地域の魅力を活かせないかと考えました。実行委員会の名前に「春蘭」を選んだのも、開発の進んだ奥能登の山の中で生き残ってきた「しぶとさ」、「粘り強さ」、「きれいさ」を持つ春蘭の花がこの地域の魅力を象徴するものだと考えたからです。春蘭に地域活性化の夢を託して「グリーンストック、水と緑を後

世に引き継ごう。きっと見つかるはず、あなたの探し物」をテーマに観光森林・観光農業等、地域全体を林農事公園ビジネスとするプランをまとめた春蘭の里構想を策定し、実現に向けて取り組むことにしました。



春蘭

付け加えれば、地域の高齢者が元気でした。この「元気な高齢者」の笑顔とプラス思考があれば地域づくり・地域再生も夢ではないと思いました。

■多くの取り組み

結成以来、たくさんの取り組みを行いました。まず 1 つが農林産物の加工・販売です。山菜やはぎ干し米、薪や炭を販売しました。地域の女性や高齢者の雇用を発生させるために加工販売するための有限会社も設立させました。総菜製造業と菓子製造業の許可も取りました。わら製品等の加工製造・直売を行う「のと夢づくり工房」も開設しました。

さらに農産物を「売るのではなく、食べてもらおう」と発想を変えて、「農家民宿」による交流人口の促進に取り組みました。メンバーの中で条件の良かった家を改修し、平成 9 年に「春蘭の宿」を開業しました。



農家民宿第 1 号「春蘭の宿」

■能登の農家の姿をありのままに

農家民宿はお金をかけずにこだわりを持つことで付加価値を付けることを目指しました。受入に当たっては1日1組と限定して貸切の宿とし、山菜、キノコなど地域の伝統的な漬物や料理でもてなすことにしました。こだわりと言っても昔ながらの姿をありのままに見せることです。農業体験のメニューも田んぼや炭焼きなど、家で昔から生業にしてきたものを取り入れています。夏の教育旅行等には地域の祭礼「キリコ祭り」体験を行っています。

■農家民宿の普及

春蘭の里で農家民宿が普及した最大のきっかけは「石川グリーンツーリズム促進特区」の認定にあります。民宿を始める時にネックになるのが消防法等の許認可を得るための改修工事の設備投資でした。しかし、この特区認定を受けることによって規制が緩和され改修工事も少なくすみました。このおかげで、平成15年に4軒が民宿として開業しました。

活動を拡大していくとともに安定して宿泊客を確保するためには、学校の修学旅行等の団体客を獲得することが大事であると考えました。それには1度に200人は受入可能にする必要がありました。更なる賛同者を得て農家民宿は平成19年に10軒、20年に15軒、21年に30軒、12の集落まで拡大しました。実際21年度までの教育旅行受入は100人に満たなかったのに対し、22年度では700人に達しました。農家民宿の拡大と共に平成18年には交流宿泊所「こぶし」を整備し、同時に運営団体NPO法人「こぶし」を立ち上げています。



教育旅行受入

■中国語圏からの旅行者受入

近年、石川県は谷本石川県知事が自ら上海に赴くなど中国観光客の誘客に力を注いでいます。団体客を受入可能になった今、次は中国圏から

の旅行者です。教育旅行（インターシップ）で受入の際に知り合った台湾出身の学生を22年から春蘭の里実行委員会の事務局職員として雇用することに成功しました。そのかいもあって石川県が誘致した中国からの修学旅行生第1号を春蘭の里で受け入れることが出来ました。この時、民宿のお父さんお母さんたちが中国語の日常会話を職員から教わり出迎えに備えました。

■SATOYAMA

春蘭の里実行委員会の活動を語る上でははずせないものとして農家民宿の他に、「里山保全」があります。平成8年から春蘭が貴重な資源であると考え、保全と安定的な供給を確保するため分布調査を実施すると共に、地域住民の協力を得て山の手入れを行いました。



手入れをされたきのこ山

さらに有志5人で17haの土地を購入し、周辺の山林と合せて「きのこ山」として整備を行いました。現在春蘭の里実行委員会にとって、「きのこ山」はキノコや山菜が大事な資源であると同時に、山菜採りやキノコ狩りなどの体験も大切な資源となっています。

近年「生物多様性」や「SATOYAMA」という言葉をよく聞きます。人と生物がバランスよく共存していくことが大切と言う考え方だと思います。春蘭の里にとって必要だった「里山」の保全が世界で注目されるようになりました。

平成22年度に名古屋市で開催された生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の視察を春蘭の里で受け入れました。その際「SATOYAMA」の代表として紹介されました。

また、今年6月に「能登の里山里海」が、日本初の国連食糧農業機関（FAO）の「世界農業遺産（GIAHS）」

に登録されました。その中で春蘭の里も「能登の里山を象徴する農村景観を有している」と評価されています。

このように世界に認められ、改めて地域の自然の素晴らしさに気づかされたと同時に、これまでの活動が間違いでなかったと言う自信になりますし、新たな誘客に繋がると期待しています。

3. 課題と展望

■民宿の売上は月40万円を目標

現在農家民宿の売上目標は月40万円です。集落の存続・活性化には若者の後継者が不可欠です。若者が生活できるだけの売上が必要です。月40万円を前提として、米1俵3万円で販売出来れば農家の生計が立てられます。都会の賛同者を得て、春蘭の里の米を1kg500円で買っていただく「米百俵の地域振興運動」を展開したり、1次産業の活性化と観光産業の結びつきを強くしていくことが交流人口の増加に繋がると考えています。

■高齢者は大事な地域資源

幸いにして春蘭の里には元気な高齢者がたくさんいます。高齢者が元気な間に、若者が戻ってくる地域の下地づくりをすることが今私たちに課せられた義務ではないでしょうか。また、これまで私たちの祖先たちが育んできた「能登の里山」の風景をありのまま後世に残したいものです。



水田と黒い瓦と白い壁の風景

今後も民宿売上月40万円を目標に、行政に頼らない・行政が応援したくなるようにプラス思考で物事を考えながら若者が戻ってくる・住みつく地域づくりをしたいと考えています。